

利益の確定方法PART 2

前回、第13回では上昇した銘柄の利益を確定するやり方として、三段上げ銘柄と関門観測法をネットメンバーサービスの画面を使って簡単に説明した。

今回は、三段上げ、関門観測法以外の利益確定法(売り時を判断する方法)について、「柴田罫線」株式週報の付録である「株式投資ゼミナール」を題材に説明してみたい。

この「株式投資ゼミナール」は株式週報を1年以上定期購読されている読者には、株式週報を購読するうえでの参考として無料でお配りしているものである。

まず、下の「柴田罫線」株式週報別冊「株式投資ゼミナール」の第2回の紙面を見ていただきたい。

「柴田罫線」株式週報別冊「株式投資ゼミナール」第2回

柴田罫線 株式投資ゼミナール

第2回 実際の売買(6つのポイント)

新聞の株価欄などをみて仮想売買しているときは利益を上げることができても、実際の取引では利益を上げられない投資家は多い。ここでは株式投資に盛むにあたっての重要なポイントにそって、実際における売買手法を説明する。

●株式投資における6つのポイント

週報編集部は、右の6つのポイントが株式投資において重要だと考える。今回は、このポイントにそって、柴田罫線の実践での活用法を解説していく。

まず、①について考えるための材料として、週報2001年2月2日号の冒頭文の一部を再掲載する。
「住宅購入のために貯めた2000万円がゼロになった」という投資家から聞いた、「抗ガン剤を開発した東亜合成が買収」という証券会社の営業マンの言葉に乗せられ、信用取引で20万株、300円で購入したのは2000年7月。しかし、半年後に信用の期日が到来し198円で売却せざるを得なかった。投資は自己責任であることを、あらためて肝に銘じておきたい。

②は第1回で解説したとおりだ。

●下値斜線付近で買い、好材料で売る

今回は③、④、⑤、⑥について、2001年3月23日号で新規買い転換として紹介したニッセン(大②8248)を例に、大勢にもふれながら説明する(右図参照)。

3月23日現在、ニッセンは既出株といえる364円の株価をつけていた。低位株単純平均は197.1円と、2月14日の買い転換後から7%上昇していたが、2000年7月12日の高値227円までの上げ余地があった。

値がサ株の大勢をあらわす日経平均、TOPIXも2001年3月23日に買い転換して大勢買い転換となり、週報は号外を発行した。これを受けて、買い出動を考えるわけだ。

翌週、3月26日のニッセンの株価は275円で寄り付いた。日足罫線の下値斜線^{※1}は240円付近を通過しており、この日の安値264円、翌27日の安値261円は買いを入れても良いレベルだ。その後、4月4日の安値252円まで押したが、このあたりで買い増してもいい。

結局、ニッセンの株価は258~288円でもみあった後、4月16日に「英ロスチャイルド・グループが筆頭株主に」という報道を受けて、翌17日にはストップ高で比例配分となった。18日には446円という高値をつけ、出来高も112万8200株と、最近10年で最高の水準となった。

ここで、持ち株の半分程度を利確うべきだ。371円以上で売り、四割以上の利益を確保することができたはずだ。好材料が出て上昇し、出来高が膨らんだときは高値をつける傾向があるが、そこは利確の時にあって、買ってはならない。

残り半分の株を長期保有する理由は、ニッセンの株価が93年の上場来高値4920円の10分の1以下である、一株当たり純資産額593円を割り込んでいる、自己資本比率19.1%、黒字転換しているなどファンダメンタルズからみても割安と考えるためだ。ただ、長期保有しない場合は、2001年7月6日に高値440円をつけたが、高値の関門^{※2}である4月18日の446円付近で売ったほうがいいだろう。

●6つのポイント●

- ①売りの判断は、他人に頼らず自分自身で行う。
- ②大勢に即して売買する。絶対の買い場は1年に1~2回(第1回参照)。
- ③下値斜線、安値の関門付近まで押したところを買う。すでに上昇した場合は見送る。
- ④何回かに分散して投資する。
- ⑤利確の売りは、高値のメドとなる関門、上値斜線、出来高の水準、材料などをみて臨機応変に行く。
- ⑥現物買いの長期投資を基本とし、ファンダメンタルズも考慮する。

ニッセン(大②8248)



- ※1 下値斜線は、3月5日の安値195円から3月15日の220円に向かって引く。上値斜線は、1月24日の高値339円から4月18日の高値446円に向かって引く。この基準を「上げ基準」といい、下値斜線は押し目買い、上値斜線は上げ止まりの目安となる。
- ※2 前につけた高値を「高値の関門」と呼び、この付近では上げ止まりやすいとされている。逆に前につけた安値を「安値の関門」と呼び、この付近では下げ止まりやすい。

「6つのポイント」のなかの
で利喰いのメドを紹介。

- ・高値の関門
- ・上値斜線付近
- ・出来高の水準
- ・材料 など

その他に、
第13回で、下げ初めの長大陰線は暴落、第14回で、上げ老境の長大陽線は天井、第16回で、同幅二段上げ「いる」売りでの利喰い法、第21回で、順次小幅となる二段上げの利喰い、など利益確定の参考になる記事を実例とともに紹介している。
もちろん、第13回で紹介した三段以上の上昇での利益確定、関門観測法も実例をあげながら詳しく紹介されている。

「ニッセン(大 8248)」の罫線を例に、高値の関門での利喰い、上値斜線付近での利喰い、出来高の水準をみての利喰いのメドを紹介。

利益確定のポイント—大勢の上値斜線、長大陰陽線、出来高

前ページの「学ぶポイント」で紹介した5項目のうち、高値の関門と段上げの最終は第13回で説明したので、ここでは、**、**、**、**について簡単に説明しておく。

の「大勢の上値斜線付近」についてまず説明すると、これは第13回で解説した関門の1つだと思えばいい。詳しくは次回(第15回の学ぶシリーズ)で説明するが、大勢基道斜線を確定できれば、利喰いのメドとなる上値斜線はたやすく発見できるだろう(前ページのニッセンの例で、上値斜線は上げ止まりの目安として紹介されている)。

、**、**についてはセットにして説明したほうがわかりやすい。の上げ老境の長大陽線や長大陰線や**の出来高**(この場合は出来高の急増となる)は、『天底と転換罫線型網羅大辞典』第1巻の119ページ「人気の極致が天底」で説明されているように「相場は最良の材料発表のとき天井を構成する」に該当するものである。

つまり、大きな材料が公表され、いよいよ大相場となるだろうと考えられるころには天井や大底となってしまうことが多いということになるのである。

「柴田罫線」株式週報 1月24日号誌面



そういう意味では、新聞などで個別銘柄の好材料(たとえば5年ぶりの復配、前年比倍増の売上など)が紹介された場合は、日足罫線、週足罫線をチェックしてみるとよい。

高値の関門付近で長大陽線が出現し、出来高が急増しているなどが確認できれば、ひとつの利喰いのポイントとなる場合が多いからだ。

『天底と転換罫線型網羅大辞典』には、第四法則「い糸」型(第1巻215ページ) 第42章「相場の老若で法則法示の意味が逆になる」(第3巻32ページ)などに、今まで解説してきたことが詳しく述べられている。ぜひ、熟読されて実践に活かしてもらいたい。

なお、「柴田罫線」株式週報の本誌の「週報注目銘柄」では、買い出動の根拠となる釣足・棒足法則の解説、出動にあたっての注意点はもとより、利喰いのメドとなる高値の関門などが示されている。

「株式投資ゼミナール」を活用しながら、注意深く検討すれば相場を読む目を養ってくれるだろう。

学ぶ
ポイント

利喰いのポイントは1つだけではない。
さまざまなポイントを総合して判断することが大切である